

月のたはむれ薫ゆるころ

市川 浩

宮澤賢治の文語詩稿を讀む（十一）

氷上

月のたはむれ薫ゆるころ、氷は沍えてをちこちに、さゞめきしげくなりけり。

をさけび走る町のこら、
高張白くつらねたる、明治女塾の舎生たち。

さてはにはかに現れて、ひたすらうしろすべりする、
黒き毛剃の庶務課長。

死火山の列雪青く、
よき貴人の死蠟とも、星の蜘蛛來て網はけり。

初句の「月のたはむれ」が先づ想像を刺戟します。陰曆の一月は殆ど月影即ち月の光のない朔から始まり、月半ば、満月の望を経て再び月影を失ふ晦で終ります。冬その満月の時刻が夕暮から宵にかけての頃には自然と夜の氷上遊びに人が集り、その噂を聞いて更に人が集つて來ます。「薫ゆる」は煙や匂が立ち上つてくること、こゝでは人の氣配が立つてくることを表してゐます。

ここは池の水が凍つてスケートリンクとなつてゐて、スケートを楽しむ人が増えて一際諫がしくなつてゐます。（起聯）

この町の少年達は雄叫びを擧げて全速力で這つてゐます。明治女塾の生徒達は高張提燈を並べ掲げて氷を照してゐます。（承聯）

と見る間に、颯爽と後ろ向きに滑る人が現はれます。言はずと知れた毛剃九右衛門こと髭の剃り跡も黒々とした、役場の庶務課長です。（轉聯）

スケート場から見る遠くの連山は、今は死火山となつて、積つた雪が月光に照され青く輝いてゐるのは、身分も高く教養もある人の遺體が蠟状となつた死蠟のやうに見える。空を見上げると澤山の星がまるで天に蜘蛛がゐて網を張つたやうに、細かく輝いてゐました。（結聯）

昭和初年當時の東北地方の生活文化の一端が垣間見える作品です。月の光に誘はれて宵の一時を遊ぶ、今日の都會では忘れ去られた日本傳統的の風景の中で、人々はスケートといふ西洋式のスポーツを樂しんでゐます。役場の庶務課長は學生時代スケート部員でもあつたのでせうか、當時としては高級技術の背面滑走を披露します。その一方で髭面も特徴的な庶務課長には、近松の淨瑠璃「博多小女郎波枕」に出てくる海賊毛剃九右衛門に因んだ渾名を付けるなど江戸時代の文化も生きてゐます。因みに「毛剃」は今日的には「髭剃り」を聯想しますが、本來は役者や力士に專屬の髪結床、つまり理髮の擔當者を指します。

ここには明治開國以來七十年を過ぎ、「西洋」が漸く日本文化の一部となり始めたことが見て取れます。この後萩原朝太郎の「日本への回歸」や保田與重郎の「近代の終焉」など、「西洋」を吸収しをはつた日本のあり方を問ふ動きが始りますが、敗戦で全ては失はれます。再び「西洋」を學び直して七十年、グローバル化の中で日本文化の多様性を如何に傳承、發信できるか正念場を迎へてゐます。

（平成二十八年十一月十五日受附）